

## 多国籍企業とナショナリズム— 21世紀への展望

講演者：板垣興一（一橋大学名誉教授）

釣谷武次（ワシントン州立大学政治学部教授）

司 会：鈴木典比古（国際関係学科教授）

日 時：November 8, 1994 (13:00-16:00)

場 所：シーベリーチャペル

板垣興一教授は、社会主義体制が崩壊した後の世界において、世界システムの再構築が進展しないままに各国のナショナリズムの登場が続発している現状を鑑み、ナショナリズムこそが未だに各国民国家の行動を動機づける最も根源的な力であると分析した。教授によればナショナリズムは政治・経済・社会・文化の各次元を総合したネイションビルディングの全プロセスを貫く国民国家の精神的基盤である。しかし、この基盤も、その国民国家の成長と成熟につれて変化していく。そして、利己的性格をもちがちなナショナリズムが、その利己的性格の内に在りながらもそれを超越して他の国民国家との共存と共栄のために一段と高いインターナショナリズムへと変容していかなければならなかった。このプロセスは大国に対して理性的な行動を要請するものである。

釣谷武次教授は新しい世界像形成のために大国がどのような哲学と行動をとらなければならないかを、“ポスト工業化の国際システム”の中で戦争の非合法化を法的、システムの、実行的に確立することで示した。そして、このプロセスは、“リベラル・ナショナリズム”によって達成されるとする。リベラルなナショナリズムは、各国間で“意味の共有化”の範囲を拡大する努力を通じて漸進的に実施されなければならない。また、リベラル・ナショナリズムの実現は経済と技術が大幅に進歩することにより、その成果を持つる国と持たざる国との間で再配分されることを前提としている。つまりリベ

ラル・ナショナリズムの成功の為の前提条件はポジティブ・サム・ゲームである。アメリカはその意味で今でもこのリベラル・ナショナリズムを各国に保障する力と威信を有してはいるが、近時このレベルに低下をみられる。これは実質的低下という面もあるが、多くは、この力と威信をどう使うかという政治の意思に問題がある。

(講演は日本語で行われました。)

(文責：鈴木典比古)